論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（心理学）	氏名	日原　尚吾
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

現代日本青年における否定的アイデンティティの心理社会的特徴と発達

論文審査担当者

主　　査	教　授	杉村　和美
審査委員	教　授	岡本　祐子
審査委員	教　授	森永　康子
審査委員	准教授	梅村　比丘

〔論文審査の要旨〕

本論文は，青年期における否定的アイデンティティと現代日本社会の発達的問題との関連性を明らかにすることを目的としている。アイデンティティ発達を肯定的な自己の要素のみに着目して把握してきた従来の研究の問題を克服するために，否定的な自己の要素を自ら選択して形成する否定的アイデンティティの観点を導入し，その有効性を実証した。

論文の構成は，次の通りである。

第１章「本研究の目的と背景」は４節からなる。第１節「アイデンティティ発達研究の問題点」では，従来の研究はアイデンティティが自己の肯定的・否定的要素のバランスにより規定されることを見逃してきたと指摘している。第２節「否定的アイデンティティ」では，社会的に望ましくない否定的要素を多く取り入れ，肯定的要素を排除して構成する自己の全体的自覚を否定的アイデンティティと定義し，その背景要因として罪悪感と基本的信頼感の喪失を挙げている。第３節「否定的アイデンティティと現代青年の発達的問題」では，否定的アイデンティティと現代日本特有の社会に対する問題のある信念や多様な不適応との関連を論じている。第４節「否定的アイデンティティ者のアイデンティティ形成の取り組み」では，否定的アイデンティティ者が，自分の生き方について選択肢を探す「探求」と選択肢を決め傾倒する「コミットメント」に取り組めていない可能性を指摘している。第５節「本研究の目的」では，以上の背景を踏まえ，否定的アイデンティティと現代日本青年の発達的問題との関連性を明らかにすることを本論文の目的としている。

第２章「否定的アイデンティティ者の抽出手続きの開発」は２節からなる。第１節「量的データを用いた検討」（研究１－１）では，18～29 歳の大学生 408 名に，20 個の『私は，…』に自由に回答させる 20 答法を実施し，記述の肯定的内容と否定的内容のバランスの偏りから対象者を肯定群，否定群，バランス群の３群に分類した。そして，３群の中で否定群がアイデンティティ，基本的信頼感，環境探索の得点が最も低く，罪悪感と職業混乱の得点が最も高かったことから，20 答法を用いた否定的アイデンティティ者抽出手続きの妥当性が支持された。第２節「質的データを用いた検討」（研究１－２）では，研究１－１の参加者のうち肯定群，否定群，バランス群を含む 22 名に対して面接調査を実施し，３群の回答の質的相違を検討した。その結果，否定群の対象者は，自己が全体的に望ましくな

いという主観的感覚を語り，アイデンティティの危機の深刻化が罪悪感と基本的信頼感の喪失と結びついていた。このような質的特徴は他群の対象者には見られなかったことから，本研究の否定的アイデンティティ者抽出手続きの妥当性が質的データからも支持された。

第３章「否定的アイデンティティ者の発達的問題」は２節からなる。第１節「否定的アイデンティティと問題のある信念の関連」（研究２）では，高等教育機関に所属する 18～25 歳の学生 2313 名にオンライン調査を実施し，否定的アイデンティティと社会に対する問題のある信念（二分法的信念，シニシズム，社会への不信感）の関連を検討した。否定的アイデンティティと各指標との個別の関連と指標の組み合わせで構成されるプロフィールとの関連の両方から，否定的アイデンティティ者が，社会を「敵と味方」など明確に分割し，社会に不信と敵意を向けることが明らかとなった。第２節「否定的アイデンティティと不適応の縦断的関連」（研究３）では，研究２と同じ対象者に６か月間隔で２度追跡調査を行い，分析対象者 916 名の結果から，否定的アイデンティティは後の時点の不適応（外在化問題，自殺念慮，ひきこもり親和性）を予測するとともに，前の時点の不適応によって予測されるという，双方向の関連が示された。

第４章「否定的アイデンティティとアイデンティティ形成の取り組みの縦断的関連」（研究４）では，研究３と同じ対象者，同じ時期に実施したアイデンティティ形成への取り組みの指標と否定的アイデンティティの関連を検討した。その結果，社会に受け入れられる将来の生き方を決め傾倒できないことが否定的アイデンティティにつながり，否定的アイデンティティを有することが，現在考えている将来の生き方が真に傾倒に値するかどうかを検討しなくなることにつながることが明らかになった。

第５章「総合的考察」は２節からなる。第１節「本研究の成果」では，現代日本青年の多様な不適応の理解に否定的アイデンティティの観点が有効であることを，社会・文化の中で周辺化された若者の擬似種化の視点から論じている。また，否定的アイデンティティ者に対する有効な教育的・臨床的介入として，ソーシャルメディアの活用を示唆している。第２節「本研究の限界と今後の課題」では，本研究の知見の再現性を，高等教育機関に所属しない青年や成人で確認する必要性を挙げている。さらに，否定的アイデンティティ者が否定的な人間として承認されようと自身の否定的要素を他人に示す可能性があることから，不適応を自己評定のみでなく他者評定で客観的に測定することの重要性を論じている。

本論文は，次の３点で高く評価できる。

１．従来理論的にしか検討されてこなかった否定的アイデンティティ者について，抽出手続きを開発し妥当性を示すことで，実証研究を展開していくための素地を整えた点。

２．否定的アイデンティティ者が，社会を二分法的にとらえ敵意と不信を向けること，外在化問題，自殺念慮，ひきこもり親和性という不適応に陥りやすいことを示した点。

３．否定的アイデンティティとアイデンティティ形成への適切な取り組みの欠如との関連を明らかにした点。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和　元年　7 月　31 日